故武田宗久氏保管資料（武田宗久コレクション）について

村田六郎太

１．資料収納の経緯

加曽利貝塚の保存運動の中心として活動され、千葉市の文化財審議委員長や博物館協議会長、加曽利貝塚博物館友の会副会長などを歴任されることで、文化財全般の保存や活用に尽力くださった武田宗久先生が2001年３月に急逝されてから、すでに６年を経ている。

2003年春に故武田先生の資産を相続された武田晴彦氏から、稲毛にある先生の旧宅に所蔵されていた記録・図面・書籍類に関する相談を受け、その多くを加曽利貝塚博物館へご寄贈いただくこととなった。現在、この資料については整理中である。その後の2005年に、武田晴彦氏が夷隅郡長南町にある故武田先生のご実家の整理中に土器や石器、鉄器等を数多く発見され、直ちに博物館に連絡された。取りあえず博物館に搬入し、整理する中で、その全てが寄贈されることとなった。

２．資料の概要

2003年に搬入された資料の内、稲毛の旧宅から搬入されたものは写真・書籍・調査資料（図面等）などを主体として、コンテナ30箱ほどにもなる。そのほか、千葉市長谷部（主理台）貝塚出土深鉢、犢橋貝塚出土注口土器、船橋市金堀台貝塚出土注口土器の３個体が、注記により確認された。調査の際、鎧櫃に収納された甲冑については、千葉市立郷土博物館で収納することで調整を図っている。

調査資料等は現在整理作業中で、資料目録の作成途上にある。なお、整理途上に発見された千葉市幕張町の旧円城寺関係の絵図等については、郷土博物館の千葉市史担当に整理を委ね、遺跡ならびに考古関係資料を中心に整理を進めている。

2005年に搬入された土器群は、縄文土器をはじめ、弥生土器片や土師器、須恵器、布目瓦などで、粘着剤を使ったタック紙にペン書きで出土地等が記載されていた。しかし明確に判読できるものは少なく、一部に剥離したものも見られた。石器類についても同様で、打製石斧、磨製石斧などの完形品や石棒頭などあるものの、出土地が判別できるものが少ない。鉄器類は鋤や鎌、馬具等が見られるが、出土地はまったく不明である。

これらの資料の中で、縄文土器については復原された痕跡を持ち、接着剤の劣化・剥離が進行した状態ではあるものの、他の土器群とは趣を異にした状態であった。

全ての土器片を水洗・整理後に、特に縄文土器について接合を進めるとともに、タック紙に記載された「千葉郡都村古山貝塚」を基に文献等を精査すると、大宮守誠が考古学雑誌第27巻６号で報告した「千葉県加曽利古山貝塚に就て」に掲載されている土器群の一部と類似する。また、報告された発掘地点も、現状の加曽利南貝塚とその南に広がる台地上付近を示していることから、加曽利南貝塚およびその周辺で出土した土器である可能性が極めて高い。

３．資料の報告に関する方向性

表題のとおり、故武田宗久氏保管資料については「武田宗久コレクション」と命名し、整理作業を進めている。しかし、ネガを中心とした写真資料については被写体の判定が困難で、推定の域を脱し得ないものも多い。また、加曽利貝塚関係文書等の中には、遺跡保存運動に関わる個人情報も多く含まれていることから、調査記録類も含めた全ての資料の公開には慎重に対応する必要がある。これらのことから、前述のとおり資料目録を作成して報告することを当面の目標としている。

ただし、土器・石器等を含む遺物群については、早急に整理を進めて公表することとした。これは70年以上の時を経て出土地の博物館に里帰りしたこれら縄文土器群について、その詳細を報告することで、第二次世界大戦を経て大切に保管されてきた故武田先生への感謝の気持ちと考えていただきたい。

なお、資料の紹介にあたり、故武田先生の母校である早稲田大学関係者への執筆依頼を検討し、実験等で博物館に出入りする長谷川陽君が執筆し、今回の紀要掲載に至ったところである。